

# 漢音 -t の進化

大 高 順 雄

Evolution of Chinese -t

OTAKA Yorio

0. 漢語は梵語 Bodhidharma の -r- を達磨、nirvana 涅槃のように、またトルコ語 Türküt の -r- を突厥のように、入声 -t をもつ語で表記した。この入声は漢語では早くも唐時代に弱化し始め、終に消失した。この漢語音を受容した諸語はそれを -l/-r と表記した場合もあり、消滅させた場合もある一方、日本語はこの入声を一、七、八、日、月におけるように、チ、ツと表記する。この現象に就いては、周知の通り、日本語における漢語の入声に関する、浜田敦氏の研究があり<sup>1</sup>、沼本克明氏の要約がある<sup>2</sup>。本論でこの入声の進化の状況を概観する。

## I 進化 -t>-l/r の確認

### I.1 韓語文献

I.1.1 李基文は最古の史書『三国史記』(1149)に記された高句麗語の三 mil および於乙 al に語末流音の存在を指摘した<sup>3</sup>。

I.1.2 『郷歌』<sup>4</sup>は高麗時代(918-1392)歌を収集したものであり、各歌の正確な成立年は不明であるが、次のような音声表記が見える。

#### I.1.2.1 -ㄷ을を表わす場合

乙 을 第二 賞賛如来歌	切徳叱身乙 “功德の身に會はばや”
第三 廣修供養歌	佛前灯乙 “仏前の燈火を”

注 1 濱田敦著「促音と撥音」『人文研究』1 大阪市立大学文学界(昭和24年) pp. 103-4.

2 沼本克明著「第五部 入聲・撥音韻尾論 第一章 唇内入聲音の變遷」『日本漢字音の歴史的研究』汲古書院 平成9年 pp. 639-67.

3 李基文「高句麗の言語とその特徴」『韓』第一卷第十号 1972、p. 29.

4 『小倉進平博士著作集(一) 郷歌及び吏読の研究』京都大学国文学会 1974(復刻版)[京都帝国大学法文学部紀要 第一](初版 大正十三年)

	第六	請轉法輪歌	長乙隱 “長き”
를	第六	請轉法輪歌	法雨乙乞白乎叱等那 “法雨を乞いまつり”
늘	第十六	處容歌	奪叱良乙 “奪はんとするを”
達을	第二十五	長才遇賊	毛達 “得ぬ”
逸일	第三	廣修供養歌	油隱大海逸留去耶 “灯油は大海なり”
	第九	恒順衆生歌	明火隱乙根中沙音賜焉逸良 “迷火に蔽はるる根にぞ移り給ひ”
察은	第六	請轉法輪歌	覺月明片秋察羅波處也 “覺月明かなる秋を戴くなれ”
盼은	第十三	老人獻花歌	我盼 “我を”
			花盼折叱可 “花を手折りて”
	第十四	安民歌	窟理叱大盼生以支所音物生 “枢機の大を生を以って支ふる所の者”
	第十八	盲兒得眠歌	膝盼 “膝を”
I.1.2.2 -은 を表わさない場合			
立사	第四	懺悔業障歌	賜立 “給へ”
	第二十一	月明師兜嚧	陪立 “陪るべし”
舌여	第二	稱讚如來歌	舌良衣 “舌より”
쇠	第七	請佛住世歌	哀呂舌 [詠嘆]
逸이	第四	懺悔業障歌	顛倒逸耶 “顛倒して”
叱을	第二十四	信忠栢樹歌	月羅理影支古理因淵之叱 “月の影宿れる池に”
	第一	禮敬諸佛歌	佛體吃剎亦 “仏の国土なり”
盼히	第二十二	月明師為亡妹嘗齋	次盼伊遣저히고 “懼れをなし”

ここに既に漢音韻尾 -t の存続と消失の例を見ることが出来る。

I.1.3 『鷄林類事』<sup>5</sup> (1103年) に用いられた -t 入声語を掲げよう (数字は語辞の記載順を示す)。

2 日曰 姪	3 月曰 契	6 雪曰 嫩	17 佛曰 孛	19 一曰 河屯
23 五曰 打 戌	25 七曰 一急	26 八曰 逸 荅	57 石曰 突	58 水曰 没
64 井曰 烏没	66 花曰 骨	75 漆曰 黄漆	93 猪曰 突	98 馬曰 末
169 舌曰 蝎	183 白米曰 漢菩薩	184 栗曰 田菩薩	211 鐵曰 歲	268 笠曰 蓋
286 箸曰 折	289 筆曰 折	318 立曰 立		

この66 骨 には2様の解釈がある。

- 1) 骨 = 髀。12世紀におけるこの高麗音髀は、15世紀の世宗当時には髀に変化する。

5 姜信沆『鷄林雜事「高麗方信」研究』[首善新書4] 再販 成均館大学校出版部 1991 の影印本による

これは𪛗>𪛗>𪛗>𪛗を想定させる。

2) 骨 = 𪛗。12世紀におけるこの高麗音は、15世紀の世宗当時の音と同じである。これは𪛗>𪛗>𪛗を仮定させる。

李基文は『鷄林類事』に使用された入声音は発音が定まらず、発音されたりされなかったりするとして、次のように説明する。

この入声語尾の弱化消失過程に対して従来顕著な注目を集めて来たのは、敦煌に発見された唐代後半期ないし五代の漢蔵対音資料である。ここには当時の中国西方方言の実際の発音が反映されているので、その中に入声韻尾が注目し値する特徴を見せてくれる。即ち、これらの資料には入声韻尾が本来の -k, -t, -p ではなく -g, -r, -b で表される事実が確認される。このうち、-r は少し古い年代の資料に -d として現れることも興味ある事実である。これは二言を要するまでもなく、-t が -d を経て -r に発達したことを示してくれるのである<sup>6</sup>。

李基文は更に「五曰打戊」、「六曰逸戊」、「花曰骨」、「猪曰突」、「舌曰蜎」、「笠曰蓋」（音渴）、「梳曰苾」（音必）、「箸曰折」（七曰石）に末音 /ɐ/ を認めることは可能であり、例えば、「箸」は蜎、「舌」は蜎と読ませた可能性が高く、語末子音のない語に対しても原則的な読方があり得たとする<sup>7</sup>。

これについては、羅常培氏も次の例を挙げている<sup>8</sup>。

千字本	弗 p'ur	密 'bir	滅 'byar	勿 'bur
	達 dar			
大乘中宗見解	八 par	畢 pyir	髮 p'ar	佛 p'ur
	拔 p'ar	別 p'ar	滅 'byer	密 'byir
	達 dar			
阿弥陀經	弗 p'ur	佛 'bur	達 'dar	
金剛教	八 par	發 p'ar	佛 bur	滅 'byer
	末 'bar	滅 'byer	末 'bar	

I.1.4 鄭麟趾は『訓民正音』（1446）の「訓民正音解例」を作成した人物についてこう記している。

I.1.4.1 命詳加解釋 以喻諸人於是 臣與集賢殿應教臣崔恒 副校理臣朴彭年 臣申叔舟 脩撰臣成三問 敦寧府注簿臣姜希願 行集賢殿副脩撰臣李璿 臣李善老等 謹作諸解及

6 李基文「鷄林雜事の再検討」『東亜文化第八輯李崇寧博士還曆記念論叢』서울大学校 文理科大学 東亜文化研究所 1968 p. 219.

7 李基文 同上 p. 225.

8 羅常培著『唐五代西北方音』[國立中央研究院歷史語言研究所單刊 甲種之一] 上海 大安 1963 (民國二十二年版の影印) p. 17 及び p. 19.

例 以敘其梗概<sup>9</sup>。“世宗殿下は詳しく解釈を加え、皆に諭すよう命じられたため、臣下の私は集賢殿の応教の崔恒、副校理の臣下朴彭年、臣下申叔舟、脩撰の臣下成三問、敦寧府注簿の臣下姜希願、行集賢殿の副脩撰の臣下李塏、臣下李善老らと共に、謹んで解説と用例を作り、その梗概を述べた。”

I.1.4.2 鄭麟趾はまた同書の「終聲解」でこう記している。

且半舌之ㄷ 當用於諺 而不可用於文 如入聲之ㄷ字 終聲當用ㄷ 而俗習讀爲ㄷ 蓋ㄷ變而爲輕也 若用ㄷ爲ㄷ之終 則其聲舒緩 不爲入也<sup>10</sup>。“また半舌音のㄷ音は諺（口語）にのみ用いるべきで、文語に用いてはならない。入声のㄷのような語は、終声にㄷを用いるべきである。しかし俗習はそれをㄷと読む。蓋し、ㄷが変化して軽くなったのであろう。もしㄷを用いてㄷの終声とすれば、その音が緩くなって入声とならない。”

これは漢音 -t が韓語の俗音において -ㄷへ変化していたことを示す例である。

I.1.4.3 『訓民正音解例』終聲解<sup>11</sup>に終声を持つ例がある。

如・・為梨花・의꽃為狐皮 “例えば、・・は梨の花であり、・의꽃は狐の皮である”

ここでは、花と皮にㅍが読まれる。それは漢音 -t の存続である。

I.1.5 『龍飛御天歌』（1447）は訓民正音の創製後における最初の文献である。

꽃도코 여름 하・니<sup>12</sup>（有灼其華 有蕢其實）

ここにはまだ、ㅍに終声ㅍが保持されている。それは文音であることを暗示すると考えられると同時に、訓民正音の保守的傾向を示す好例である。

I.1.6 東国正韻（1448）

I.1.6.1 質勿諸韻宣以端母為終聲而俗用來母其聲徐緩不宜入聲<sup>13</sup> “質と勿に属する終声は必ず端母（ㄷ）をもって終声を作るべきであるが、一般に來母を用い、その音は（ㄷ）のろく遅く、入声に適當でない。”

これもまた当時の入声が文語音だったことを推定させ、『訓民正音』の「終聲解」に述べられた（I.1.4.2）「また半舌音のㄷ音は諺（口語）にのみ用いるべきで、文語に用いてはならない」を肯定するものである。

I.1.6.2 訓民正音定其音又於質勿諸韻以影補足因俗歸正<sup>14</sup> “訓民正音は漢字音を定め、また質と勿に属する韻は影母をもって來母を補い、俗により正に歸る”。

9 東学語文学会編『訓民正音』国語国文学資料叢書 半島出版社 1989 「訓民正音解例」p. 67.

10 同上書 p. 48.

11 東學文學會篇著『訓民正音』[國語國文學叢書1] 半島出版社 1989、p. 46.

12 『龍飛御天歌 上（自卷第一 至第五）』[李章閣叢書 第四] 京城帝国大学法文学部 京城 昭和12年 卷第一第一章 p. 20（なお、この一行は詩經「桃夭」‘灼灼其華 有蕢其實’にある）

13 『東国正韻 全六卷』[国宝 142] 建国大学校出版部 1988 p. 13.

14 同上、p. 17.

影母はㄷが入声だったことを示す印であり、現実の発音を示すものではないと考えられる。訓民正音の保守性は明白である。

#### I.1.7 『月印釈譜』(1459年)

成佛 ㄱㅇ 涅槃 ㄴㅇㅍㅍ (第十七<sup>15</sup>)

菩薩 ㅍㅇㅍㅍ 說法 ㄴㅇㅍㅍ (第二十一<sup>16</sup>)

#### I.1.8 『朝鮮館訳語』(15世紀初から末<sup>17</sup>)

1	天	哈嫩二	3	月	得二	4	星	別二
60	河	悶二	66	石	朶二	69	路	吉二
172	米	色二	201	馬	墨二	243	寺	迭二
274	弓	華二	275	算	酒二	279	刀	跨二
286	碗	酒擺二	288	匙	速二	371	正旦色二	
417	脚	把二	443	錦被	根你卜二	447	線世二	
537	二	覩卜二	545	十	耶二			

終声の入声が完全に表記されている<sup>18</sup>。『訓民正音』が音の発展を規制する作用を及ぼした結果と判断される。

#### I.2 漢語文献

I.2.1 『広韻』(1008)に掲げられた -t 入声語は質韻(279字)、術韻(99字)、櫛韻(13字)、物韻(97字)、迄韻(24字)、沒韻(169字)に見られる<sup>19</sup>。しかし反切によって入声の音値を決定することは出来ない。

I.2.2 『中原音韻』(1325)<sup>20</sup>は、「中原音韻序」に「以入声派入平上去三声」<sup>21</sup>とし、次の語を掲げる(下線は入声語、□は判読不能字を示す)。

四 齊微 入聲作上聲 質隻炙織□汁只 七戚□刺 匹闕僻劈 吉擊激□辣戟  
急汲給 筆北 失室識適拭軾飾釋濕□唧積稷跡脊鯽 必畢蹕筆碧壁璧璧 昔惜息  
錫漸 尺赤□□叱鶴 的鞞嫡滴 德得 滌剔惕 吸隙翕檄覲 乞泣訖 國 黑

さらに、「中州樂府音韻類編」<sup>22</sup>は次の例語を添える。

三 支思 入聲作上聲 洪瑟[音史] 塞[音死]

15 張泰鎮編 寶林寺藏本影印 月印釋譜 1896 教學研究社 p. 1、p. 3.

16 月印釋譜(二一・二三) 1984 서울 흥문각 第二十一 p. 6、p. 9.

17 李基文著「朝鮮館訳語の総合的研究」『서울大論文集〈人文・社会科学〉14』(1968) pp. 43-79によれば、朝鮮館訳語の成立は15世紀末ないし16世紀初であるが、その後1549年ごろまで種々の加筆が行われた。

18 権仁瀚著『朝鮮館訳語の音韻論的研究』國語學叢書29 서울 태악사 1998 p. 264参照。哈嫩

19 坂井健一編『宋本 廣韻全譯』第7分冊(臻攝)汲古書院 2002 p. 45 ff, p. 86 ff, p. 97 ff, p. 118, p. 133 ff, p. 161 ff.

20 『中原音韻 附 中州樂府音韻類編』上中下[元] 周德清輯 北京 中國書店 1978.

21 上記 上

22 上記 下

十四 車遮 入聲作平聲 協穴俠挾纈 傑竭碣 疊迭牒揲喋課埵經 入聲作上聲  
屑薛繼蝶褻變□ 切竊妾 結劫潔頰莢 怯絜篋節接楫 血歇嚇蝎 闕缺闕 決訣  
譌蕨馱 鐵餐帖帖貼 雪蝎 鼈別□ 說 拙輟 轍撤澈掣 瞥 哲褶折 設攝噉

『中原音韻』の基礎音系については、それを元代の大都の音韻体系とする北方音説と北宋の都開封の音とする南方音説とがある<sup>23</sup>。それはともあれ、-tが-kないし-pに混入し、判別し難くなったことは明らかである。

I.2.3 『古今韻會舉要』<sup>24</sup> (1297) は、1292年ごろ黄公紹の編になる膨大な『古今韻會』を弟子の熊忠が要約して編集したものである。中古音を基準としつつ、口頭音に近い音を反映しており、入声 -t は『中原音韻』におけるように、-k ないし -p に混入している<sup>25</sup>。

(-t) 資 月 曷 黠 屑 錫

(-k) 屋 沃 覺 忽 藥 陌 職 治

(-p) 緝 葉 洽

#### I.2.4 チベット語文献

周知のように、1907年に西安の北西に広がる甘粛省の敦煌千仏洞から唐代 (618-907) から五代 (907-960) に至る資料が発掘された。それらの中には『千字本』、『金剛經』、『阿弥陀經』、『大乘中宗見解』の残巻があり、漢字音がチベット文字で表記されている。

I.2.4.1 羅常培氏は上古音、中古音、近代音の進化を次のように推定している<sup>26</sup>。

上古音	中古音	→近代音
*-b, *-d, *-g > *β, *δ, *γ	無収声之陰音	→全国方言
*-p, *-t, *-k >	-p, -t, -k	a) →広州、客家、汕頭、廈門 b) →呉語 (?)
*-p, *-t, *-k >	-b, -d (-r), -g > -β, -δ (-r), -γ	→官話、西北方言など

I.2.4.2 高田時雄氏は『千字本』(C)、『金剛經』(K)、『阿弥陀經』(O)、『大乘中宗見解』(T)、『天地八陽神呪經』(TD)、『法華經普門品』(FP)、『南天竺国菩提達磨禪師觀門』(NT)、『道安法師念仏讚』(DA)、『般若波羅密多心經』(P) に韻母の山攝において入声 -t の -r への変化が確認し、次のように断定している<sup>27</sup>。

23 大島正二著『中国言語学史』汲古書院 1997 pp. 236-7.

24 『古今韻會舉要』[韓國學古辭典叢書] 서울 亞細亞文化社 1975, p. v.

25 同上 p. 411. なお、坂井健一著「宋詩押韻字にみられる音韻上の一、二の特色」『中国語学研究』汲古書院 1995年 p. 371参照。

26 羅常培著『唐五代西北方音』[國立中央研究院歷史語言研究所單刊 甲種之一] 上海 大安 1963 (民国二十二年版の影印) p. 68.

27 高田時雄著『敦煌資料による中国語史の研究 一九・十世紀の河西方言一』創文社 昭和六十三年 (1988) pp. 150-1.

-t 入声韻尾が -r で写されるのは、チベット文字ばかりではない。同時代同地域の資料では、コータン・ブラーフミー文字、ウイグル文字、ソグド文字の資料がすべてこれを -r で写している」<sup>28</sup>

### I.3 イラン語文献

敦煌千仏堂の漢語文書には三種のマニ教文献<sup>29</sup>がある。それを収録した『大正大藏經』によって731年ごろの中世イラン語を音写した漢字は、吉田豊氏の調査に従えば<sup>30</sup>、-t 入声はいまだ保たれていることが分かる。

2	mjuət 勿	4	p'juət 拂	6	薩 sāt
10	muāt 末	12	ât 渴	12	p'juət 弗
15	juət 鬱	17	lġāt 列	28	tuət 咄
29	nuət 訥	32	d'ât 達	37	γət 紇
38	xāt 喝	57	sġət 悉	68	puāt 鉢
69	b'uāt 跋	70	xuət 忽	84	γuāt 活
94	xġet 瑟				

### I.4 ウイグル語文献

ウイグル（回紇とも回鶻）は鉄勒の一部族から起こり、唐中期の774年に突厥に代って、唐・元にかけてモンゴル高原、甘肅、新疆を制覇したが、840内乱とキルギス族の襲撃のため四散した。しかし漢語の音声表記に貢献している。

I.4.1 馮家昇氏はウイグル本写本の『菩薩大唐三藏法師傳』において、この翻訳文献の制作年代は、925年から950年の間と想定し<sup>31</sup>、突厥を türk、乙を ir と転写している<sup>32</sup>。

I.4.2 庄垣内正弘氏は『ウイグル漢字音』<sup>33</sup>において、『聖妙吉祥実名經』に「bir-miet-密」を挙げて、更にこう論じる。

ウイグル文字音写漢語の音韻体系は300年ほど古い時代の漢語西北方言を使用していた<sup>34</sup>。

『天地八陽神呪經』に記された「血決 kwyr」<sup>35</sup>を事実とすれば、これは入声 -d>-l

28 同上 pp. 155-6.

29 Traité manichéen 北京図書館 宇56 (T) Compendium of the Doctrines and Styles of the Teaching of Mani 英国図書館 S 3969およびフランス国立図書館 P 3884 (C) Chinese Manichaeen Hymnscroll 英国図書館 S 2659 (H)

30 吉田豊著「漢訳マニ教文献における漢字音写された中世イラン語について」(上)『神戸市外国語大学外国語学研究17』(1986) pp. 1-15.

31 馮家昇著「回鶻文寫本“菩薩大唐三藏法師傳”研究報告」『考古学學專刊 丙種第一號』中國科學院考古研究所編輯 中國科學院出版 1953 p. 8.

32 馮家昇著「回鶻文寫本“菩薩大唐三藏法師傳”研究報告」『考古学學專刊 丙種第一號』中國科學院考古研究所編輯 中國科學院出版 1953 p. 6, p. 26.

33 庄垣内正弘「ウイグル漢字音について」藤本幸夫編『日韓漢字・漢文受容に関する国際学術會議論文集』富山大学人文学部 平成15年 pp. 415-45.

34 同上 p. 416.

35 同上 p. 423.

の変化を証明することになる。

同氏はサンクトペテルブルク所蔵のウイグル文字表記から漢語音を再構し、漢字の入声は一律に -r と表記した。「ウイグル文字表記に使用された漢語音の再構」<sup>36</sup>によれば、次のようである。

(幫母) 八 v'	別 pyr	畢 pyr	(明母) 滅 pyr ~ vyr	沒 pyr	密 pyr	蜜 pyr
(非母) 発 v'r			(奉母) 仏 vyr			
(定母) 発 t'r	脱 t'r ~ d'r		(泥母) 涅 tyr			
(清母) 七 syr			(心母) 薩 s'r			
(從母) 疾 syr			(神母) 実 " syr ~ syr	術 " swr	説 " swr ~ syr	
(見母) 吉 kyr			(疑母) 月 kwr			

また、「第9章 ウイグル漢字音リスト」<sup>37</sup>によれば、次のようである。

(曷韻) 達/tar/t'r 薩/sar/s'r 遏 (Skr)k'  
 (末韻) 跋/par/p'r 末/(Skr)p' 脱/tar/t'r  
 (黠韻) 八/far/v'r 刹/čar/c'r  
 (月韻) 発/var/v'r 伐/var/v'r 闕/kur/kwr 月/gur/kwr  
 (薛韻) 別 滅 舌 説  
 (屑韻) 涅 結  
 (沒韻) 沒  
 (質韻) 畢 密 蜜 七 疾 悉 実 日 吉  
 (術韻) 出 術

さらに<sup>38</sup>、

(曷韻) 達/tar/t'r 薩/sar/s'r 渴 (Skr)k'  
 (末韻) 跋/par/p'r 末/(Skr)p' 脱/tar/t'r ~ d'r

## I.5 蒙古語文献

『蒙古字韻』<sup>39</sup>を Web-site に公開された吉池幸一氏の「パスパ文字の字母表」と「Phags-pa script」の語例を解釈すると、-t が完全に消失していることが分かる。因みに、前者の ee は後者の i に対応する。

-ee      -chuee 歟   -dzuuee 絶   -gee 決   -hee 瞎   -huee 血   -khuee 輟   -lee 列   -shuee 説

36 庄垣内正弘著『ロシア所蔵ウイグル語文献の研究』[ユーラシア古語文献研究叢書1] 京都大学大学院文学研究科 2003、p. 41-58.

37 同上 pp. 126-36.

38 同上 p. 132.

39 影印大英博物館藏舊鈔本 蒙古字韻 二卷 昭和三十一年 關西大學東西學術研究所 pp. 122-7. 尾崎雄二郎著「十一 大英博物館本蒙古字韻札記」『中國語音韻史の研究』創文社 昭和六十一年 pp. 167-83参照。漢字音の確認に助力して下さったオヨンゲレル君(大阪大学大学院言語文化研究科博士課程修了)に感謝する。

-suee 雪 -uuee 絶  
 -ecee -aecee 抉 -keeee 缺 -kheeee 厥 -leeee 劣 -yeeee 月 -zheeee 啞  
 -i -di 室 -ni 涅 -thi 鐵 -yi 噎  
 -u -au 謁 -gu 刮 -hu 纈 -shu 刷 -su 屑 -tsu 切

## II 進化の解釈

### II.1 韓語における解釈

II.1.1 Henri Maspero は、Paul Pelliot に従って、 $t > \delta$  と考える<sup>40</sup>。

II.1.2 羅常培は、 $-d > -\delta > -r > \emptyset$  を推定する<sup>41</sup>。

II.1.3 有坂秀世は、「高麗の初期は、新に大いに支那文化を採り入れて諸制度を整備した時代であったから、朝鮮の現行漢字音の如きも、この時代（第十世紀）に支那の首都たりし汴（bian）梁（即ち開封）の地方から借入されたものと考え、極めて穏当な見方である」とし<sup>42</sup>、さらに、「唐朝後半期の吐蕃人がその文字を以て当時の西北支那音を写した例に於いては、入声韻尾は常に p, r (d), g 相当の文字で表されている」<sup>43</sup>と論じている。世宗は訓民正音の創製に当たって集賢殿の申叔舟（1417-75）を遼東の黄瓚の許に送り、漢語音韻を学ばせたが、得るところがなかったようである<sup>44</sup>。

II.1.4 俞唱均は、百濟（4世紀～7世紀）の漢字音において、韻尾の子音は上古音と中古音の相違を示すと考え、中古音に次のように3序3系を建てる。

陰声	- $\emptyset$	-i	-u
入声	-k	-t	-p
陽声	-ng	-n	-m <sup>45</sup>

さらに同氏は新羅（356-935）の漢字音の特徴として、韻尾の -t が -l / -r に対応する次例を挙げる<sup>46</sup>。

- a) 尸 - 乙      阿尸兮県（或云阿乙兮） - 安賢県
- b) 吉 - 永      吉同県 - 永同県
- c) 火 - 伐      比自火郡（或云比斯伐）
- d) 火 - 弗      達句火県（一作達弗城）〈輿勝〉

これらは次のように解釈されている。

- a) は -r / -l である。

40 Henri Maspero, Le dialecte de Tch'ang-ngan sous les T'ang, in *Bulletin de l'Ecole d'Extrême-Orient* 20, Hanoi, 1920, pp. 1-124.

41 羅常培「唐五代西北方音」『歴史語言研究所単刊甲種之十二』上海 1933 pp. 61-2.

42 有坂秀世「漢字の朝鮮音について」『国語音韻史の研究 増補版』三省堂 1957 p. 311.

43 有坂秀世「入声韻尾消失の過程」『国語音韻史の研究 増補版』三省堂 1963 p. 601.

44 Gari Ledyard, Biographical Notes on Huang Tsan, 亞細亞研究 1 (1963) 高麗大学亞細亞研究所 p. 133.

45 俞唱均『삼국시대의漢字音』서울민음社 1991, p. 371.

46 同上 p. 529.

c) とd) は〈火〉(中期語)の訓と考えられる。

II.1.6 李基文はこう論じる<sup>48</sup>。

同氏はまたこう指摘する<sup>49</sup>。

なお、開放は宋・金の都であり、北西地方は現在の甘肅、青海、陝西に当たる。

中<sup>ナカ</sup>國<sup>クニ</sup>皇<sup>ミコ</sup>帝<sup>テ</sup> Meng<sup>メウ</sup> 계<sup>ケイ</sup> 신<sup>シン</sup> 나라<sup>ナラ</sup> 히<sup>히</sup> 니<sup>니</sup> 우리<sup>우리</sup> 나<sup>나</sup> 랫<sup>랏</sup> 常<sup>ジョウ</sup> 쌍<sup>쌍</sup> 談<sup>タン</sup> 담<sup>담</sup> 애<sup>애</sup> 江<sup>カウ</sup> 강<sup>강</sup> 南<sup>ナム</sup> 남<sup>남</sup> 이<sup>이</sup> 라<sup>라</sup> 호<sup>호</sup> 느<sup>느</sup> 니<sup>니</sup> 라 “中國  
は皇帝がいます国で、我が国の日常語で江南であるとする”

II.1.7 姜信沆氏は『鷄林類事』の研究において、次のように主張する<sup>51</sup>。

47 藤堂明保著『中国語音韻論 その歴史的研究』光生館 1980 p.177.

48 李基文『國語音韻史研究』[國語學叢書3] 서울특별시 탑출판사 七版 1995, p. 98.

49 李基文『新訂版 国語史概説』서울시 太学社 1998、p. 88.

50 『訓民正音』 半島出版社 pp. 73-4.

51 姜信沆「鷄林類事」宋代音資料』『東洋學5』檀國大學校附設東洋學研究所編 1975 p.4.

写音たり、中古音において入声韻尾をもっていた漢字で写音したりしていても、  
國語の -k, -t, -p と一対一で対応することはなかった。

II.1.8 S. M. Martin は、-t/-l 互換の起源を、原モンゴル語 r、トゥングース語 r、朝鮮語 [r] = /l/、前チュルク語 r<sub>2</sub> を有意味であると主張し、朝鮮語 T を原アルタイ語 r<sub>2</sub> に由来すると推定した<sup>52</sup>。

II.1.9 李基文は12世紀高麗語において語尾音 -l だった語辞が15世紀中葉に至ると、あるいは -s、あるいは -t、あるいは -c、あるいは zero に変化したと推定した<sup>53</sup>。

李崇寧氏はこのような李基文氏の解釈に敬意を表すると述べた上で、山猪を喫들  
と言う方言を傍証にしつつ、こう述べた。

15世紀中葉が変異の時期であるように誤解されることは止めるべきであるので、  
「15世紀中葉に至ると」を「15世紀以前に既に」と訂正すべきである<sup>54</sup>。

II.1.10 梁柱東氏は李基文氏の論文に反対した<sup>55</sup>。

花園縣、本舌火縣、(三国史 地理一<sup>56</sup>) は、何ら“舌” kele、“花” kol でなく、  
単に“舌火”の原語시불“草原”が“花園”と雅訳されたものである。밋(梳曰  
苾)、𦵏(花曰骨)、𦵏(面曰捺翩)など、齒音に終わる語は「ㄷ-ㄴ互転」でなく、  
絶対にㄴ終になることが出来ない。「猪曰突」<sup>57</sup>も「猪足縣一烏(鳥)斯廻(三国史  
地理四)の例も“들”である明証である。갈(笠)、꺈(箸)などの方言は、そ  
の実、갈、꺈などの音転であり、諸例はすべて「ㄷ-ㄴ互転」の本来の「転倒」  
である。

II.1.11 韓国語の音声変化における主要な論題の一つとして、「舌音入声ㄷと舌側音ㄴ」  
を挙げなければならない。即ち、ㄷ終声語はㄴ終声語から進化したとする見解と、ㄷはㄴ  
から進化したとする主張が対立している<sup>58</sup>。漢音 -t の -l への進化を韓語内で説明する根拠  
として役立ったのである。

52 Samuel E. Martin, *Consonant Lenition in Korean and the Macro-Altaic Question*, Center for Korean Studies, [Center for Korean Studies Monograph 19], University of Hawai'i, Honolulu, 1996, '3. Where did the -t/-l alternation come from?', p. 16.

53 李基文「鷄林類事の一考察」『一石李熙昇先生頌寿記念論叢』一潮閣 1957 p. 11.

54 李崇寧「書評 一石李熙昇先生頌寿記念論叢」(国語国文学会編『国語国文学 第十九号』) 1958年 pp. 507-8.

55 梁柱東「古歌箋割疑」『人文科學 第二輯』(1958) 延世大學校分科大学 p. 7.

56 鄭求福・蘆重國・申東河・金泰植・權惠永 訳注三国史記4 주석편 (하) 京畿道 韓國精神文化研究院 1997 p. 200 설화현 (舌火縣): 신라 良州 壽昌郡 花園縣 (달성군 화원읍) 의 옛지명.

57 鄭求福・蘆重國・申東河・金泰植・權惠永 訳注三国史記3 주석편 (하) 京畿道 韓國精神文化研究院 1997 p. 362 저족군 (猪足郡): 현재의 강원도 인제군 인제읍 일대이다. 이곳은 본래의 猪足縣 혹은 烏斯廻縣이었다가 경덕왕 때에 猪蹄縣으로 개명되었는데, 당시는 朔州 楊麓郡의 領縣이었다.

58 劉昌惇「ㄷ・ㄴ音韻變化의 連関性」延世大學校 人文研究 第三輯 (1959. 1), pp. 17-42.

II.1.11.1 ㄷ > ㄷ

方鐘鉉氏は『鷄林類事研究』<sup>59</sup>において次のような解釈を示した。

五曰打戊 다술                  花曰骨 골                  猪曰突 돌  
笠曰蓋 갈                  箸曰折 절

II.1.11.2 ㄷ < ㄷ 互換説

上で探求したように、国語の音韻変化でㄷ > ㄷ、ㄷ > 스、ㄷ > ㅅ、ㄷ > ゼロの変化が終声で生じたという諸説を紹介して来たが、そのうち後の3変化はさて置いて、ここではㄷ > ㄷの現象に就いて、これを探求しようと思う。

II.1.11.3 梁柱東氏は「ㄷ < ㄷ 互換」という理論を次のように展開した<sup>60</sup>。

「毛冬」の冬を転音借ㄷと見れば、毛冬は直ちに모ㄷと読まれ得るので、「冬」の原語が모ㄷであることが暗示される。果たして、모ㄷの原型は모ㄷないしㅁㄷである。ㄷ尾の用言は通称「ㄷ変格用言」であるㄷㄷ(走)、ㄷㄷㄷ(覚)、거ㄷ、드ㄷ(開)、거ㄷ(歩)、부ㄷ(殖)、무ㄷ(問)などの基本形は各々ㄷ、ㄷㄷ、ㄷㄷ、ㄷㄷ、ㅁㄷであることは周知のとおりである。さて、この「ㄷ < ㄷ 互換」の法則はすべて「ㄷ尾用言」に統一的に適用される。つまり、다ㄷ(異)、니ㄷ(云)、흐ㄷ(流)などの基本形もその実단、ㄷ、ㅎに他ならない。これに似た모ㄷの原型はㅁㄷであり、不能の意味のㅁㄷと同一語である。

このように、梁柱東氏はㄷ > ㄷの音韻変化を明らかにしながら、あるいは흐ㄷ-흐(流)、니ㄷ-ㄷ(云)においては、これら「ㄷ尾用言」のㄷ-ㄷ互換によって、니ㄷの原型がㄷであることを知り得るとして、「ㄷ-ㄷ互換」を想定した。同氏は逆互換ㄷ > ㄷの例を挙げなかったが、崔鉉培氏は中声の末音においてㄷとㄷが互換する現象を「万用」(두루쓰힘)と名づけて、次の例を挙げている<sup>61</sup>。

-도다(가도다) → 이로다(꽃이로다)          이더라 → 일어라  
굴뚝 “穴蛇” → 굴뚝                  올배미 “梟” → 오ㄷ배미  
잘되미 “小도미魚” → 잘되미                  잘줄음 “細皺” → 잔줄음  
병글병글 → 병글병글 (→ 병긔병긔)

上記の所説から結論として韓語の音韻変化において、ㄷ > ㄷ現象は終声と音節間とに現れ、自生的変化と考えられる。一方、方鐘鉉、李基文、李崇寧の三氏は、終声における変化のみに注目したことになる。

II.1.11.4 ㄷ > ㄷ 互換に対して現代語の用例を挙げて見よう<sup>62</sup>。

59 方鐘鉉「鷄林類事研究」『東方学志』延禧大学校東方学研究所篇 2輯(1955) pp. 19-22.

60 梁柱東全集刊行委員会『梁柱東古歌研究1』소울一潮閣 1983(東国大学校出版部 1973) p. 369.

61 최현배『우리말본』서울 정음문화사 2004 p. 140. 本書を探索して当該箇所を指摘して下さった藤本幸夫氏に深謝する。

62 李元文監修『동아 새國語辭典 完全新版』동아출판사 1989.

반질고리 (바느질고리) “針箱”  
 삼질날 (삼질날) “陰曆三月三日”  
 사흘날 (사흘날) “三日”  
 선달 (설달) “極月” “臘月” “師走”  
 선부르다 (설고 어살쁘다) “下手だ”  
 숟가락 (술가락) “匙”  
 잔짚다 (잘게생기다) “やや小さい”  
 잔주름 (잘게간 주름) “小皺の”

II.1.11.4.1 無声舌音ㄷは有声子音間にあつてㄷに変化する。この現象は次の4種類に分類される。1 ㄷ変格 2 ㄹ変格 3 語尾 4 体言

1) ㄷ変格用言

1.1) 自生的變化

語幹の終声ㄷは、從屬語の語頭が子音である場合には、ㄷに留まり、母音である場合には、ㄷとなる。

걸어 (歩) > 거더 > 거러 > 걸어	걸으니 > 거드니 > 거르니 > 걸니
길어 (汲) > 기더 > 기러 > 길어	길으니 > 기드니 > 기르니 > 길니
결어 (編) > 겨더 > 겨러 > 걸어	결으니 > 겨드니 > 겨르니 > 걸니
눌어 (焦) > 누더 > 누러 > 눌러	눌으니 > 누드니 > 누르니 > 눌니
들어 (聞) > 드더 > 드러 > 들어	들으니 > 드드니 > 드르니 > 들니
분어 (潤) > 부더 > 부러 > 불어	분으니 > 부드니 > 부르니 > 불니
묻어 (問) > 무더 > 무러 > 물어	묻으니 > 무드니 > 무르니 > 묻니
신어 (戴) > 시더 > 시러 > 실어	신으니 > 시드니 > 시르니 > 실니

1.2) 他生的變化 (音節間における同化)

- 1) 耶陽輪 | 그 기별 드르시고 [釋譜詳節六 4]<sup>63</sup>
- 2) 耶陽輪 | 줌싼도 듣디 아니씨실호 [釋譜詳節六 6]<sup>64</sup>
- 3) 물근사과요이모드며호로몬쫓느니 (淡交隨聚散) [杜詩諺解二十 十二]<sup>65</sup>
- 4) 버리는대ㄹ튼勢ㄹ燕에디러도다 (破竹勢臨燕) [杜詩諺解二十 十六]<sup>66</sup>

2) ㄹ變格

本来、ㄷ・ㄷに終わった語幹は中舌母音ㅇの接尾によってㄹに変化する。この中舌母音は調音関係で脱落する。(以下の例は劉昌惇氏の論文<sup>67</sup>から借用した)

63 『原本國語國文學叢林 原本釋譜詳節 釋譜詳節第六』 서울 大提閣 1988, p. 4.

64 同上 p. 11.

65 同上 p. 501.

66 同上 p. 503.

67 劉昌惇 同上書 p. 28.

2.1) ㄹ>ㄹㅁ変格

길다>길으다>기르다 (長→育)

날다>날으다>나르다 (飛→移)

돌다>돌으다>도르다 (回→圜)

살다>살으다>사르다 (生→使生)

줄다>줄으다>조르다 (減→縮)

2.2) ㄷ>ㄷㅁ変格

곧다>걸으다>고르다>고르다 (真→正)

눈다>눈으다>누르다>누르다 (焦→黄)

달다>단으다>다드다>다르다 (異)

모다>·다>모드다>모르다 (不→蒙)

분다>분으다>부르다>부르다 (増→滿)

흐다>흐으다>흐르다>흐르다 (散→流)

これらの例から見て、現代語のㄹ末音用言はすべて中舌音ㄹ(ㄹ)の接尾から作られたことが分かり、同時にㄹ末音用言の形成には音節間でㄷ>ㄷㅁ変化現象が作用したと考えられる。このㄷ>ㄷㅁ現象は自生的変化ではなく、同化による他生的変化である。中舌母音ㄹ(ㄹ)の添加により音節を伸張したㄹ末音用言は、他のㄹ末音用言と同じ様で、従属母音が後続する時には、その中舌母音を脱落させる。

a) 다르아>달아 (달다 “異なる”)

나라말싸미다라異乎中國 [訓民正音諺解]<sup>68</sup> “国の言葉は中国で異なり”

b) 사르아>살아 (살려 “救う”)

『龍飛御天歌』第二十一章<sup>69</sup> 白龍을살아내시니 (白龍使活) “白龍をお救い出された”

c) 두르어>둘라 (둘러 “入る”)

『龍飛御天歌』第三十二章<sup>70</sup> 行宮에도·기둘어 (賊圜行宮) “賊が行宮を囲み”

d) 오르이라>올이다 (올리다 “飛び上がる”)

『龍飛御天歌』第四十七章<sup>71</sup> 石壁에··올이샤 (絶壁馬躍) “絶壁に馬が躍り”

e) 도르아>돌아 (도려 “廻る”)

杜曲애에를희돌아글탈노라 (回腸杜曲煎) [杜詩諺解 二十四]<sup>72</sup>

同じく、中舌母音の脱落は体言にも見ることが出来る。辞例は『龍歌』、『訓民解例』に見られる<sup>73</sup>。

II.1.11.4.2 語尾

ㄷは이の後でㄷㅁに、補助語幹더、도、다は러、로、라に変化する。

이다 : 이라

68 『訓民正音』半島出版社 p. 73.

69 前出『龍飛御天歌 上 (自卷第一至卷第五)』p. 334.

70 前出『龍飛御天歌 上 (自卷第一至卷第五)』p. 452.

71 『龍飛御天歌 下 (自卷第六至卷第十)』京城帝国大学法文学部 昭和十三年 p. 92.

72 『原本影印 韓國古典叢書 (復元版) II. [詩歌類] 杜詩諺解』서울 大提閣 1972 p. 497.

73 劉昌惇 前出 pp. 28-9.

이더라 : 이러다

이도라 : 이로다

- a) 나라홀갑스온그테일후물드리우도다 (垂名報国余) [杜詩諺解 二十 三十一]<sup>74</sup>
- b) 글워를 더더鶴鶴을뵈듯더라 (抛書示鶴鶴) [杜詩諺解 八 三十九]<sup>75</sup>
- c) 노쁘지피서 삼네민홀보리로소니 (高齋常見野) [杜詩諺解 三 二十八]<sup>76</sup>

#### II.1.11.5 その他

意義部でㄷ가ㄹに変化することがある。

端之為来 不思惟終声 如次第之第 牡丹之丹之類 [東國正韻]<sup>77</sup>

これは차테>차례 “次第” と모단>모란 “牡丹” の音変化に言及したものである。現代語には、도랑<sup>78</sup> “道場” が残存する。

### II.2 漢語における解釈

II.2.1 平山久雄は北宋の邵雍 (1011-77) の『皇極經世音声唱和図』について、こう推論する<sup>79</sup>。

音韻論的には入声韻尾/-p// -t// -k/ガなお存在していた（但し私はそれを/-p// -t// -c// -k// -wk/と見る）と仮定して、『唱和図』の“声”体系が十分に解釈が可能であることを示したいと思う。音声的にはある種の弱化が生じていた可能性は当然考えられる」とし、さらに同氏は「音韻論的には/-t/があっても、音声上では...さまざまな弱化の形態が考えられる。これらの弱化形態には声門閉鎖音が伴って、入声の短促性を保持していたのであろう。

II.2.2 藤堂明保は邵雍の『皇極經世音声唱和図』の時には、声門閉鎖の変化が完了していたと推測する<sup>80</sup>。

入声がすでに/-p, -t, -k/の形を失って、声門閉鎖に終る/-・/型になっていた。遐鋸

II.2.3 陸志韋によれば、入声 -p -t -k は漢朝において『切韻』（7世紀）が示すように、五代宋の詞には収声に互用することが可能であり、元朝に至ると中原音韻と八思巴訳語（14世紀）に見られるように、入声は摩擦音 [j] ないし [ɣ] か、喉音に変化した。漢音 -t は他の音と区別することは困難となり、元代には他の入声と区別されなくなった<sup>81</sup>。

II.2.4 蔡瑛純は次のように断定する<sup>82</sup>。

74 『原本影印 韓國古典叢書（復元版）II. [詩歌類] 杜詩諺解』서울 大提閣 1972 p. 511.

75 同上 p. 217.

76 同上 p. 82.

77 『東國正韻 全』서울 建國大學校出版部 1988 東國正韻 禮 序 p. 13.

78 『연세 한국어사전』연세대학교 언어정보개발연구원 2000.

79 平山久雄「邵雍『皇極經世音声唱和図』の音韻体系」東洋文化研究所紀要1 昭和32 p. 88.

80 藤堂明保『中國語音韻論 その歴史的研究』光生館 1980 p. 139.

81 陸志韋「國語入聲演變小注」『燕京學報』34 (1948) p. 22.

82 蔡瑛純『李朝朝漢對音研究』北京 北京大学出版社 2002 p. 270.

中古入声韻尾である梗曾江宕攝の -k、臻山攝の -t、深咸攝の -p はすべて十五世紀の資料中では -ʔ と注され、まだその残影を残しているが、十六世紀以後は完全に消失した。

しかし、こう断定する根拠が示されていない。

## II.3 客家語資料

現代客家語においては、劉添珍氏の調査によれば、入声 -t も -k も -d に変化する<sup>83</sup>。

### 1 -t>-d

#### 1.1.1 -ad

潑 bad <sup>`</sup>	八 bad <sup>`</sup>	捌 bad <sup>`</sup>	拔 bad <sup>`</sup>	鉢 bad <sup>`</sup>
撥 bad <sup>`</sup>	乏 fad <sup>^</sup>	伐 fad <sup>^</sup>	罰 fad <sup>^</sup>	閥 fad <sup>^</sup>
活 fad <sup>^</sup>	發 fad <sup>`</sup>	髮 fad <sup>`</sup>	闊 fad <sup>`</sup>	辣 lad <sup>^</sup>
烈 lad <sup>`</sup>	瞎 had <sup>`</sup>	轄 had <sup>`</sup>	歇 hed <sup>`</sup>	末 mad <sup>`</sup>
沫 mad <sup>`</sup>	茱 mad <sup>`</sup>	軋 ngad <sup>`</sup>	吃 ngad <sup>`</sup>	喫 ngad <sup>`</sup>
拔 pad <sup>`</sup>	鉞 pad <sup>`</sup>	潑 pad <sup>`</sup>	拂 pad <sup>`</sup>	煞 sad <sup>`</sup>
舌 sad <sup>`</sup>	設 sad <sup>`</sup>	薩 sad <sup>`</sup>	殺 sad <sup>`</sup>	達 tad <sup>^</sup>
察 tsad <sup>`</sup>	徹 tsad <sup>`</sup>	撤 tsad <sup>`</sup>	澈 tsad <sup>`</sup>	擦 tsad <sup>`</sup>
折 zad <sup>`</sup>	哲 zad <sup>`</sup>	浙 zad <sup>`</sup>	紮 zad <sup>`</sup>	

#### 1.1.2 -iad

孑 giad <sup>`</sup>	結 giad <sup>`</sup>	潔 giad <sup>`</sup>	抉 giad <sup>`</sup>	訣 giad <sup>`</sup>
蕨 giad <sup>`</sup>	缺 giad <sup>`</sup>	穴 hiad <sup>^</sup>	血 hiad <sup>`</sup>	傑 kiad <sup>^</sup>
竭 kiad <sup>^</sup>	缺 kiad <sup>`</sup>	闕 kiad <sup>`</sup>	熱 ngiad <sup>`</sup>	月 ngiad <sup>`</sup>

#### 1.1.3 -uad

刮 kuad <sup>`</sup>	挖 uad <sup>`</sup>	幹 uad <sup>`</sup>
---------------------	--------------------	--------------------

#### 1.2.1 -ed

擲 ed <sup>^</sup>	阨 ed <sup>`</sup>	摟 led <sup>^</sup>	密 med <sup>^</sup>	蜜 med <sup>^</sup>
蔑 med <sup>^</sup>	默 med <sup>^</sup>	滅 med <sup>`</sup>	覓 med <sup>`</sup>	捏 ned <sup>`</sup>
刺 ned <sup>`</sup>	別 ped <sup>`</sup>	歇 ted <sup>`</sup>		

#### 1.2.2 -ied

絕 chied <sup>^</sup>	切 chied <sup>`</sup>	洩 cied <sup>^</sup>	泄 cied <sup>`</sup>	洩 cied <sup>`</sup>
雪 cied <sup>`</sup>	筴 dad	跌 died <sup>`</sup>	割 gied <sup>`</sup>	決 gied <sup>`</sup>
刈 gied <sup>`</sup>	渴 hod <sup>`</sup>	喝 hod <sup>`</sup>	喝 hod <sup>`</sup>	涸 hod <sup>`</sup>
節 jied <sup>`</sup>	括 kied <sup>`</sup>	乞 kied <sup>`</sup>	列 lied <sup>^</sup>	裂 lied <sup>^</sup>

83 劉添珍編『萬國音羅馬韻標住 發音字母順序排列 漢字客語文書寫 現代通用華語解釋字頭左首筆形索引 漢字客語文字典』新莊家 臺灣文史工作室 2000.

鐵 tied`

1.3 -id

逼 bid`	筆 bid`	必 bid`	畢 bid`	疾 chid^
七 chid`	漆 chid`	薛 cid`	洁 gid^	結 gid^
吉 gid`	詰 gid`	橘 gid`	逸 id`	絶 jid^
疙 kid`	栗 lid^	律 lid^	率 lid^	日 ngid`

豁 wid`

1.4.1 -od

葛 god`	刮 god`	括 god`	颯 god`	埒 lod^
劣 lod`	遏 od`	刷 sod`	說 sod`	吮 sod`
撮 sod`	奪 tod`	脫 tod`	掣 tsod`	拙 zod`
噉 zod`	卒 zod`			

1.4.2 -uod

滑 uod`	猾 uod`
--------	--------

1.5.1 -ud

淳 bud^	觸 dud`	拂 fud^	核 fud^	佛 fud`
佛 fud`	窟 fud`	忽 fud`	惚 fud`	骨 gud`
歿 mud^	沒 mud^	淳 pud`	渤 pud`	述 sud^
術 sud^	出 tsud`	擦 tsud`	凸 tud`	突 tud`
勿 ud^	物 ud^			
鬱 ud`				

1.5.2 -yud

堀 kyud^	屈 kyud`
---------	---------

1.6.1 -sd

實 sd^	失 sd`	室 sd`
-------	-------	-------

1.6.2 -tsd

蟄 tsd^	姪 tsd^
--------	--------

1.6.3 -zd

質 zd`	秩 zd`
-------	-------

2 -k > -d

2.1.1 -ad

抑 ad`	塞 ad`	值 dad`	核 had^	刻 kad`
灼 nad`	咬 ngad`	擲 pad`	蝕 sad^	薑 tsad
灼 tsad`	掣 tsad`			

2.1.2 -iad

揭 giad`

2.2.1 -ed

得 ded`	德 ded`	或 fed^	獲 fed^	穫 fed^
惑 fed^	黑 hed`	墨 med^	白 ped`	迫 ped`
匹 ped`	疋 ped`	卜 ped`	蔔 ped`	色 sed`
測 sed`	踢 ted`	忒 ted`	側 tsed`	策 tsed`
賊 tsed`	廁 tsed`	惻 tsed`	擇 tsed`	澤 tsed`
側 tsed`	則 zed`	仄 zed`		

2.2.2 -ied

批 bied^	丟 died`	格 gied`	革 gied`	擲 jied`
咳 kied`	客 kied`	克 kied`	刻 kied`	剋 kied`
撇 pied`	幣 pied`			

2.2.3 -ued

摑 gued`	國 gued`	幘 gued`	幘 gued`	
---------	---------	---------	---------	--

2.3 -id

碧 bid`	璧 bid`	戚 chid`	彳 chid`	席 cid^
籍 cid^	媳 cid`	些 cid`	寂 cid`	昔 cid`
析 cid`	息 cid`	熄 cid`	的 did`	滴 did`
激 gid`	棘 gid`	歷 id^	易 id`	溢 id`
液 id`	疫 id`	益 id`	亦 id`	役 id`
抑 id`	翼 id`	奕 id`	縊 id`	驛 id`
邑 id`	極 kid`	極 kid`	杙 kid`	唧 jid`
鯽 jid`	積 jid`	績 jid`	脊 jid`	責 jid`
即 jid`	擠 jid`	力 lid^	麤 lid^	避 pid`
僻 pid`	譬 pid`	辟 pid`	霹 pid`	敵 tid^
特 tid^	狄 tid^	劃 wid`		

2.4 -od

富 bod`	托 dod`	各 god`	郭 god`	覺 god`
烙 lod`	勒 lod`	駱 lod`	落 lod`	擲 tsod`

2.5.1 -ud

不 bud`	付 fud`	咕 gud`	瀑 pud`	瀆 tud`
禿 tud`	讀 tud`	域 ud^	齷 ud^	曲 ud`
齷 zud`				

### 2.5.2 -yud

曲 kyud`

### 2.6.1 -sd

式 sd`                  識 sd`                  食 sd`                  蝕 sd`                  適 sd`

戌 sd`                  釋 sd`

### 2.6.2 -tsd

值 tsd^                  植 tsd^                  殖 tsd^                  直 tsd^

### 2.6.3 -zd

職 zd`                  幟 zd`

N.B. 1.1.3 -uad および 1.4.2 -uod は 10.2 に欠け、2.2.3 -ued は 10.1 に欠ける。また、第一聲陰昇、第二聲陽沈、第三聲俯切 (ˊ)、第四聲 (ˆ) 吊入のうち、後二者のみが現れる。古國順、何石松、劉醇鑫も現在の客家語が -ad, -ed, -od, -id, -iid, -ud, -iad, -iod, -iud, -uad, -ued を保つことを確認している<sup>84</sup>。また、現在の梅県でも、-t の保存が確認される<sup>85</sup>。ここには、-k > -t の変化が確認される<sup>86</sup>。

ts'et; 拭 pet    北 tet 得 t'et 踢 tset 側 ts'et 測 set 色 k'et 咳 het 黒 et kuét 國

## II.4 粵語資料

現在の調査によれば<sup>87</sup>、-t > -p の進化が曲江、四会、広寧、懷集、雲浮、連山、連県、樂昌、仁家、陽山、廉州において確認されている。

塔 臘 割 挿 夾 鴨 接 葉 帖 協 集 急 邑

## II.5 吳語資料

最近の研究によれば、縉雲西郷方言における三種の入声 -p, -t, -k は喉塞音尾 -ʔ の段階を経て消失したとされる<sup>88</sup>。

## III 結 論

III.1 漢語文献は、-t の進化が確認させない。

III.2 韓語文献は、-t > -l の進化を示すと同時に、その保持を示す。『朝鮮館訳語』は、-t を保存する一方、-k および -p と混用する。

III.3 イラン語文献は -t を保存する。

84 古國順、何石松、劉醇鑫著『客語發音學』台北 五南圖書出版公司 2004 二 韻母的發 p. 42.

85 李榮主編 黃雪貞編纂『梅縣方言此字典』江蘇教育出版社 1993 pp. 254-83.

86 同上 p. 254, p. 270, p. 271-2, p. 275.

87 Anne O. Yue, "Development of the Stop Endings in the Yue Dialects" 何大安主編 語言組『第三屆國際漢學會文集 南北是非：漢語方言的差異與變化』台北 中央研究院語言學研究所籌備 中華民國九十一年 p. 22.

88 陳貴麟著「中古入聲字在南部吳縉雲西郷方言的演變規律」『聲韻論叢 第十四輯』台北臺灣學生書局總經銷 2006 p. 130.

- III.4 チベット語文献とウイグル語文献においては、-tは完全に-rに進化する。
- III.5 パスパ文字では-tは完全に消滅している。
- III.6 一方、客家語の -t>-d は -t>-r の中間過程を示し、粵語は -t>-p を示す。
- III.7 周知のように、日本語のみが漢音 -t を促音チ、ツとして保存する。

キーワード：漢音 -t 韓音 -l 梵語 イラン語 ウイグル語 蒙古語 日本語 音の進化